



高橋 慎也 教授

Shinya Takahashi

「懸命に生き挫折した敗者」への共感

際立って濃い「光と影」を持つドイツ

「光と影、双方がとても濃いことがドイツ文化の魅力です」と高橋先生は語る。

背景には、「遅れてきた国家」というドイツの宿命がある。三十年戦争（1618-1648）によって国土が荒廃した結果、ドイツでは近代化が遅れてしまう。先進国であるイギリス・フランスに対抗しなければならぬもの、国として一体的な政治を行うことができないため、ドイツはルターによるドイツ語訳『聖

書』を基として形成された標準ドイツ語に、「言語共同体としてのドイツ」という機能を担わせる。つまり、「標準ドイツ語＝ドイツ国家」という図式をつくり上げたのだ。この標準ドイツ語で文学や演劇などの芸術作品がつけられた結果、それ自体が国家的な性質を帯びていく。

「一方で、国民が自らの手でドイツをつくる、という機運も生まれました。まず、理性のもとに人間は平等である」と身分制社会を否定し平等社会の原理を打ち出した啓蒙主義が広がります。その後、文学では感情の解放をうたう『疾風怒濤』運動



ドイツ語文学文化専攻の教員が、新入生のために制作した入門書

遷である。ドイツ文化において、「市民」と「民衆」にはどのような違いがあるのだろうか。

「市民とは、フランス語の『ブルジョア』。近代ヨーロッパでは、貴族階級に代わり市民階級が台頭しました。彼らは、身分ではなく自らの才覚によって自己を確立していきます。一方、民衆はドイツ語の『フォルク』。農民や漁民、手工業の人たちなど、いわゆるブルーカラー層と考えると分かりやすいと思います」ドイツには、知識も教養もある「市民」が「民衆」を束ね、国家を形成しようとする動きがあったと先生は語る。

「近代ヨーロッパの芸術家の多くは市民階級に属しており、それはドイツも同様でした。ドイツの芸術家たちは、市民文化と民衆文化の融合、や『民衆のための芸術の創造』という課題に向き合い、市民文化と民衆文化の双方に根ざした作品世界を模索していきます。一方、国家としてのドイツはイギリス・フランスへの対抗策として、民衆の文化である民謡や民話を、ドイツ国民固有の文化に位置付けます。それが国民のイデオロギー教育に悪用されることもあった。こうした動きの中、国家と民衆の間に立つ芸術家が自らの存在意義や表現に迷い、苦悩することが少なからずありました」

複雑な背景を持つドイツの芸術作品には、登場人物と作者、国家の運命が重なるものが数多く見られる。「ハッピーエンドの作品は決して多くはなく、むしろ重い気持ちが残ったります。しかし、作品世界に奥行きがあり、随所にドイツならではの輝かしい思想を読み取ることができ、ドイツの芸術作品には、そんな魅力があります」

挫折者の軌跡を壮大に描く文学作品『ファウスト』

ドイツの代表的な文学作品として先生が挙げたのが、19世紀に発表されたゲーテの『ファウスト』。悪魔と契約した主人公ファウストと街娘グレートヒエンの悲恋を綴った第一部、皇帝に仕えたファウストが海を埋め立てて理想の国づくりを行い、その過程で死ぬ第二部で構成されたもので、ゲーテが60年をかけて完成させた超大作だ。

「市民階級に属していたゲーテは、『ファウスト』にグリム童話や民謡を用いたほか、グレートヒエンを民衆の一人として設定し、作品に民衆文化を取り入れています。そうした構造も興味深いですが、私がこの作品に惹かれる理由は、自分の欲望をひたすら追求し、懸命に突き進むけれ

どゴールに到達できず、生涯を終えるファウストの存在です。第二部では民衆のためにと海を埋め立てる事業を始めますが、干拓予定地に住む老夫婦の立ち退きを図って失敗し、殺してしまおう。良かれと思った行動が犠牲者を生み出す、このゲーテの着眼点は素晴らしいと思います。最後、ファウストは盲目になり、悪魔が手下に彼の墓穴を掘らせている音を、人々が新天地創造に向けて働いているのだと誤解しながら死んでいきます」ファウストの魂は悪魔に奪われることなく、かつての恋人グレートヒエンの祈りによって救済される。こうしたファウストの結末がポジティブに解釈されることもあるが、先生はファウストを挫折した「敗者」ととらえている。「悪魔に魂を売り渡す契約までして理想を追い求めたけれど、結局実現させることはできなかった。しかしファウストは真に懸命だったからこそ追い詰められた、そこに読み手は深い共感をか



先生の「特別な1冊」でもある「ファウスト」

「民衆」を率いる「市民」が、

高橋先生の研究テーマは「市民文化と民衆文化の相互関係の歴史的变化

Close up

クローズアップ



■ 高橋 慎也 (たかはし しんや) プロフィール

1954年、山形県生まれ。1973年、山形県立山形東高等学校卒業。1978年、東京外国語大学外国語学部ドイツ科卒業。1980年、東京大学文学部ドイツ語・ドイツ文学専攻卒業。1982年、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1984年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。

■ 専門分野

・ドイツ文学、演劇、日独文化交流史

■ 趣味

演劇鑑賞と朗読 CD を聴くこと、生まれ故郷の郷土史探訪。

演劇では岡田利規という作家・演出家の舞台が好きです。朗読 CD のお気に入り、村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』のドイツ語版と英語版。郷土史探訪については、山形県上山市生まれの作家、斎藤茂吉の足跡を山形やドイツなどで訪ねています。



ドイツに建立された斎藤茂吉歌碑の除幕式に参加。ドイツ語で茂吉についての講演も行った

欧米でのハルキ人気を決定付けた小説です。戦争体験の克服、暗い欲望の克服、絶望からの愛の再生などのテーマをめぐる語り美しい作品です。

(3)『尼僧とキューピッドの弓』多和田葉子(講談社)
ドイツの尼僧が日本の弓から放たれたキューピッドの矢に当たって恋に落ち、僧院から逃げ出したらどうなるのか、という物語を、日本とドイツの文化と歴史の違いを踏まえて綴ったユーモラスな小説。文化衝突・文化比較の点からも面白い作品です。



■ 特別な1冊

・『ファウスト』ゲーテ
最高の恋と社会事業を実現しようとして罪を重ねたファウストの物語は、読むたびに発見があります。近年はファウストとグレートヒェンの悲恋をつづった第一部よりも、ヨーロッパによる植民地主義への批判を含む第二部の方を面白く感じます。

■ 高校生へのメッセージ

外国の人や文化と接していると、日本、特に地方文化の大切さを痛感します。山歩き・街歩きを通じて日本の自然と文化を体感し、歴史や文化に関する本にも触れて、自分が生まれた所・住んでいる所の歴史と文化に親しんでもらいたいと思います。

■ お勧めの本を3冊あげてください。

- 『本格小説』水村美苗(新潮社)
現代日本への批判、アメリカへの愛憎、純愛への憧れなどが詰まった抜群に面白い長編小説です。
- 『ねじまき鳥クロニクル』村上春樹(新潮社)



「ドイツ映画祭」のパンフレット。先生も寄稿している



「市民」と「民衆」の関わりからもうかがえるように、ドイツの文化はさまざまな面で日本との違いを有しています。こうした「異文化」に触れることで、知性を高め感性を磨き、自らの視野を広げてほしいと思います。また、ドイツという特徴ある国の歴史的な背景を探ること、社会と文化がどのように関係し合うかを分析する能力も養ってほしいと願っています」

先生が現在注目しているのが、東西ドイツ統一後の文学と舞台芸術だ。特に「ポストドラマ演劇」と呼ばれる、民衆文化を取り入れながら前衛的でもある、演劇や戯曲に注目

■ 作者と国家との関係が重なる演劇作品―『ハムレット／マシーン』

先生が現在注目しているのが、東西ドイツ統一後の文学と舞台芸術だ。特に「ポストドラマ演劇」と呼ばれる、民衆文化を取り入れながら前衛的でもある、演劇や戯曲に注目

き立てられるし、グレートヒェンによる救済も説得力を持つのだと思います」



命に追い求めるがゆえに挫折する者の姿がある。国という存在が相手だけに、その苦悩は私たちの想像を超えて深い。「ハイナール・ミュラーを始めドイツの優れた芸術家たちは、国や社会という逃げようのない存在との軋轢の中で作品を生み出していった。その極限状態が、作品を人生の核心や真実へ近づかせたのだと思います。こうした作品には確かな力があります。私たちが人生の壁に突き当たった時、彼らの作品に触れることで視野が広がり、生への意欲を改めてかき立てられることでしょう」

ピアの「ハムレット」を素材に、ハムレットが国の改革について悩み、官僚主義のロボットに変身してしまう、という作品だ。「共産主義国家の旧東ドイツは、民衆のための国家」であることをうたい、その下で知識人や芸術家たちは民衆のための社会や文学、演劇の創造に取り組みました。しかし、彼らは国家によって弾圧される。ハイナール・ミュラーもその一人で、政府の干渉により作品を上演することができず、妻の詩人インゲは自殺します。彼は国を憂い、ハムレットの舞台となるデンマークと東ドイツを重ねて作品をつくるものの、改革するべき国が消滅してしまう。非常にドラマチックな背景を持つ作品です」

文化は社会の中でどのように受け止められているか、ドイツと日本の文化交流はどのように行われているかを学生に伝えたい」と考える先生は、授業やゼミなどで「学生と社会をつなぐ」試みを数多く行っている。その一つが、インターンシップによる「ドイツ映画祭」運営への学生の参加だ。これは、文化ビジネスへの就職を意識する学生にとっても良い体験の場となっている、と先生は語る。

「文化は社会の中でどのように受け止められているか、ドイツと日本の文化交流はどのように行われているかを学生に伝えたい」と考える先生は、授業やゼミなどで「学生と社会をつなぐ」試みを数多く行っている。その一つが、インターンシップによる「ドイツ映画祭」運営への学生の参加だ。これは、文化ビジネスへの就職を意識する学生にとっても良い体験の場となっている、と先生は語る。

ドイツの文化と歴史を学び、自らの視野を広げてほしい